

立待月

陰暦8月15日の月は「十五夜」といいます。「十五夜」は真丸な月で、満月といい、名月ともいいますが、この他にも「望月(もちづき)」、「望の夜」、「良(りょう)夜(や)」と様々に表現されています。

「望月」といえば、藤原道長の

この世をば

我が世とぞ思う望月の

かけたることもなしと思えば

という有名な歌を思い出しますね。

また、日本人は昔から、見える月ばかりにではなく、「無月」や「雨月」のように、何かに隠れて見えない月にさえ、表現する言葉を与えて来ました。それは、日本語の持つ豊かさであると同時に、日本人の感性の豊かさが生み出した表現の数々でもあります。

さて、もう少し月の話を続けましょう。

「十五夜」の前日の夜の月は何というのでしょうか。それは、「待(まつ)宵(よい)」といいますが、この他に「小望月」という表現もあります。

「待宵」というのは、「来るはずの人を待っている宵(広辞苑)」という意味ですが、それは「十五夜」の満月を心待ちにしているという心境にも通じるということでしょうか。

待宵のささえ切れずに降り出でぬ 芽明

と詠めば、とうとう降り出した雨への恨めしさが伝わってきます。

「十五夜」の次の日は「十六夜(いざよい)」といいますが、一体何故「いざよい」というのでしょうか。実は「いざよい」は「いさよい」の濁った形で、元の意は「進もうとして進まぬこと。ためらうこと(広辞苑)」とあり、陰暦16日の月は、満月よりも遅く、ためらうようにして出てくるところから名づけられたとのこと。まるで、月にも感情があるかのようです。

「十六夜」の翌日の月は「立待(たちまち)月(づき)」といいますが。「立って待っているうちに」、つまり「それ程僅かな時間の内に出てくる月」という意味

ですが、これが「忽ち」の言葉の原義という説もあります。

「忽」という字は、たちまち、にわか、すみやか、突然、という、殆ど時間に間がない状況を指していますが、同じ「たちまち」という表現を用いても、昔の人と現代人とでは、時間の進み方、スピード感覚が随分と違うのだなと感じます。

昔の人と現代人のスピード感の違いは、環境変化のスピードの違いから来ているように思います。現代人は、まるで何者かに追われるように忙しい日々を送っていますが、昔の人の時間は、今よりずっとゆっくりと流れていたのではなかったかと思います。

ちなみに、18日の月は「居待(いまち)月(づき)」、19日の月は「寝待(ねまち)月(づき)」、そして20日の月は「更待(ふけまち)月(づき)」といいます。

忙しくしていることが存在の証であるかのような錯覚に陥ることがしばしばありますが、日々のちょっとした変化をも見逃さず、敏感に感じ取って生活していた昔の人びとは、結構豊だったのじゃないかと思います。

(塾頭 吉田 洋一)